

羽犬塚山ノ前遺跡Ⅲ

福岡県筑後市大字羽犬塚所在遺跡の調査

筑後市文化財調査報告書

第 104 集

平成 24 年

(2012)

筑後市教育委員会

序

本書は、市営住宅跡地周辺の市道拡張工事に伴い、平成 22 年度に筑後市教育委員会が発掘調査を実施した記録であります。今回報告します羽犬塚山ノ前遺跡第 4 次調査は、主に奈良～平安時代の竪穴住居 2 軒が確認され、墨書土器など貴重な遺物が出土しました。

本書が文化財保護思想普及の一助として、また、学術研究の資料として活用されることを願っております。最後に、本書の刊行にあたり多大なご協力を賜りました関係者の皆さまに厚くお礼を申し上げます。

平成 24 年 3 月

筑後市教育委員会
教育長 高巢 一規

例 言

1. 本書は、平成 22 ～ 23 年度にかけて実施した「羽犬塚山ノ前遺跡第 4 次調査」埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、現地調査、整理作業、報告書作成を筑後市教育委員会が行い、発掘調査で出土した遺物及び記録した図面類、写真類等は当教育委員会で所蔵、保管を行っている。
3. 調査に用いた測量座標は、国土調査法第Ⅱ座標系（旧日本測地系）を基準としており、本書に示される方位は座標北（G.N.）を示している。従って、本文中に記される遺構の方位はこれを基準としたものであり、水準については T.P. を基準としている。
4. 本書に使用した図面類について、遺構実測図は小林勇作、上村英士が作成し、遺物実測及びデジタルトレースは株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
5. 本書に使用した写真類について、遺構写真は小林、上村、遺物写真は小林が撮影した。
6. 本書に使用した遺構番号は、頭に調査回数、並びに種別記号を表記し、種別は以下の記号を用いた。
種別記号：SI - 竪穴住居、SK - 屋内土坑・土坑、SP - 柱穴・ピット、SX - 不明遺構・カクラン
7. 本書の執筆と編集は、小林が担当した。

目 次

I . 調査組織	1
II . 位置と環境	2
III . 調査の概要	3
(1) 基本層位	3
(2) 検出遺構	3
(3) 出土遺物	9
(4) 小結	10

I . 調査経過と組織

当地は、筑後市大字羽犬塚字山ノ前 116-1 に所在する。平成 22 年度に市営住宅跡地周辺の市道拡張工事箇所について筑後市役所土木課から遺跡照会があり、協議の結果、遺跡が包蔵する約 300 m²の範囲について筑後市教育委員会が緊急発掘調査として実施することとなった。

調査区は南北方向に細長い東西 2 箇所に設置し、平成 22 年 12 月 15 ～ 16 日の 2 日間で重機（バックホー 0.2 m）による表土剥ぎ（有限会社徳光建設へ委託）を実施し、12 月 20 日から記録保存として遺構検出・遺構掘削・実測作業・写真撮影を現地で行った。平成 23 年 1 月 6 日に重機での埋め戻し完了をもって現地調査を終了した。遺物の整理作業については、平成 23 年度に市教育委員会が行い、遺物実測及びデジタルトレースは埋蔵文化財サポートシステム株式会社へ委託した。調査並びに報告書作成は小林勇作が担当した。

【調査組織】

1. 発掘調査（平成 22 年度）

総括	教育長	高巢 一規
	協働推進部長	山口 辰樹
庶務	社会教育課長	高井良清美
	社会教育係長	馬場 信二
	社会教育係	小林 勇作（調査担当）
	々	上村 英士
	々	吉村由美子（囑託）

2. 遺物整理・報告書作成（平成 23 年度）

総括	教育長	高巢 一規
庶務	社会教育課長	高井良清美
	社会教育係長	村上 一彦
	社会教育係	小林 勇作（報告書担当）
	々	上村 英士
	々	吉村由美子（囑託）

3. 発掘調査参加者

発掘作業員

今山美咲子・加々良一美・蒲池 京子・加藤 礼子・角 里子・田島 好江・中村 三男
橋本 高登・原 秋子・堀田 武利・渡邊 泰子

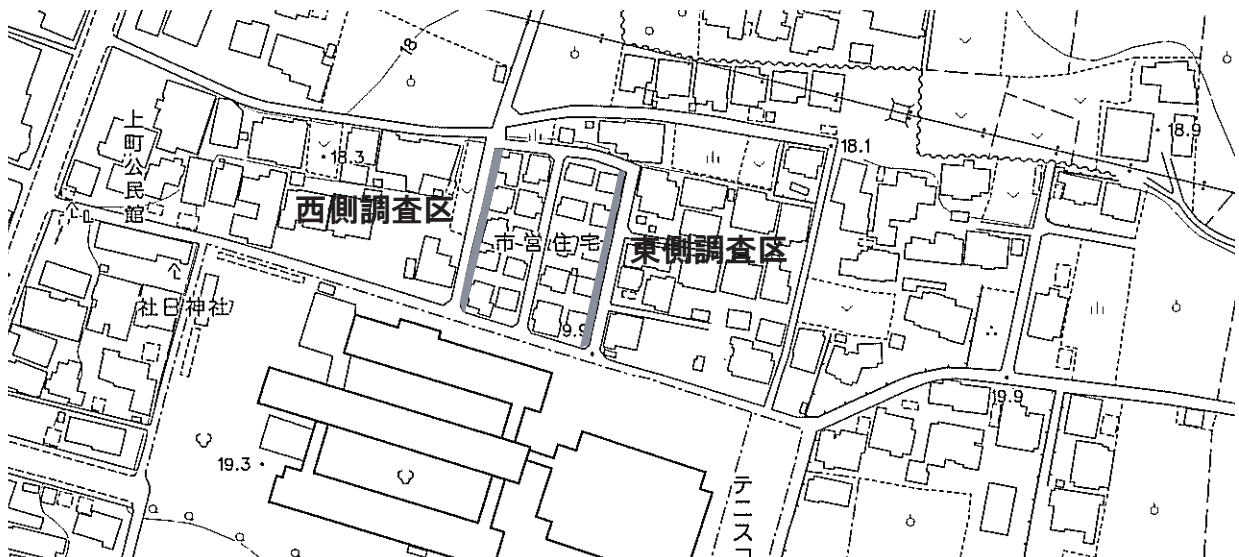


Fig.1 羽犬塚山ノ前遺跡（第 4 次調査）地点位置図（1/2,500）

Ⅱ . 位置と環境

筑後市は、福岡県の南西部、筑後平野の中央部にあたる。市域を JR 鹿児島本線と国道 209 号線が縦断し、国道 442 号線が横断する。また、市南西部には一級河川の矢部川、中央部には山ノ井川や花宗川、北部には倉目川が西流する。市北部には耳納山地から派生する八女丘陵が西に延び、灌漑用の溜池が点在する。低位扇状地である東部や低地である南西部には農業水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部の丘陵地域では果樹園や茶畑、東部や南西部では米麦中心の田園地帯が広がる。市域地は、国道に沿って市の中心部に形成されている。

当遺跡は、筑後市の中心部、標高 19m 位の低位段丘上に点在する。羽犬塚は、江戸時代の主要道路であった薩摩街道（別名：坊ノ津街道）沿いに設けられた宿場町として栄えて以来、現在も JR 鹿児島本線、国道 209 号、国道 442 号バイパスが交差するなど交通の要として発展している地区である。この羽犬塚地区には、現在もなお、宿場町に伴う多くの遺跡が残されているが、近世以前の遺跡も数多く点在していることが発掘調査によって明らかにされている。今回、報告する羽犬塚山ノ前遺跡もそのひとつであるが、南隣にあたる羽犬塚中道遺跡では、8～9 世紀代にかけての竪穴住居や掘立柱建物等の遺構が複数検出され、生活雑器の他に文字が書かれた墨書（刻書）土器が出土している。墨書は「郡符葛野」「東」「瀦」、刻書では「大」「井」「仁？」等である。当遺跡の東側に展開する羽犬塚山ノ前遺跡第 1 次調査からは古代律令期幹線道路の「西海道」跡が検出されている。ほかに 8～9 世紀代にかけての竪穴住居も検出されており、「妻大」「川」「木」と書かれた墨書土器、「米」の刻書土器が出土している。更に東隣にあたる前津丑ノマヤ遺跡からは 7 世紀末から 8 世紀中頃に比定される掘立柱建物数棟が検出されている。当地は歴史地理学の研究によって小字名である「丑ノマヤ」に着目し、『延喜式』、『和名類聚抄』に記載されている西海道の「葛野駅」として想定されている。先述した羽犬塚中道遺跡出土の墨書土器「郡符葛野」は、その名を示す一級の関連資料として注目されている。

【註】

1. 上村英士「羽犬塚山ノ前遺跡 - 第 1 次調査 -」『羽犬塚山ノ前遺跡』筑後市文化財調査報告書第 48 集 筑後市教育委員会 2003
2. 永見秀徳「羽犬塚中道遺跡 - 第 1・2 次調査 -」『筑後市内遺跡群Ⅵ』筑後市文化財調査報告書第 65 集 筑後市教育委員会 2005
3. 上村英士「前津丑ノマヤ遺跡」『前津丑ノマヤ遺跡』筑後市文化財調査報告書第 80 集 筑後市教育委員会 2007



Fig.2 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

- ※番号は筑後市発掘調査番号を示す
- 251 羽犬塚山ノ前遺跡(第4次調査)
 - 7 前津中ノ玉遺跡(第1次調査)
 - 11 欠塚古墳(第1次調査)
 - 18 前津塚山遺跡(第1次調査)
 - 20 羽犬塚中道遺跡(第1次調査)
 - 43 長浜鎧(第1次調査)
 - 45 羽犬塚射場ノ本遺跡(第1次調査)
 - 58 長浜鎧(第2次調査)
 - 76 長浜鎧(第3次調査)
 - 81 羽犬塚中道遺跡(第2次調査)
 - 82 徳久中牟田遺跡(第1次調査)
 - 104 前津中ノ玉遺跡(第2次調査)
 - 135 羽犬塚寺ノ脇遺跡(第1次調査)
 - 148 山ノ井川口遺跡(第1次調査)
 - 172 前津柳ノ内遺跡(第1次調査)
 - 175 前津柳ノ内遺跡(第2次調査)
 - 176 羽犬塚山ノ前遺跡(第1次調査)
 - 177 羽犬塚射場ノ本遺跡(第3次調査)
 - 180 羽犬塚中道遺跡(第3次調査)
 - 181 羽犬塚源ヶ野遺跡(第1次調査)
 - 182 山ノ井南野遺跡(第1次調査)
 - 188 羽犬塚中道遺跡(第4次調査)
 - 190 山ノ井南野遺跡(第2次調査)
 - 193 山ノ井南野遺跡(第3次調査)
 - 196 羽犬塚中道遺跡(第5次調査)
 - 198 山ノ井南野遺跡(第4次調査)
 - 199 羽犬塚山ノ前遺跡(第2次調査)
 - 217 前津丑ノマヤ遺跡(第1次調査)
 - 219 山ノ井川口遺跡(第2次調査)
 - 225 羽犬塚射場ノ本遺跡(第4次調査)
 - 228 山ノ井南野遺跡(第5次調査)
 - 244 羽犬塚山ノ前遺跡(第3次調査)
 - 247 徳久北原遺跡(第1次調査)
 - 248 山ノ井南野遺跡(第7次調査)
 - 249 山ノ井松延遺跡(第1次調査)
 - 252 長浜半屋敷遺跡(第1次調査)
 - 254 徳久アサミノ遺跡(第1次調査)
 - 255 徳久アサミノ遺跡(第2次調査)
 - 257 徳久アサミノ遺跡(第3次調査)
 - 260 羽犬塚屋鋪遺跡(第1次調査)

Ⅲ. 調査成果

(1) 基本層位

地表面下、約 0.5m 前後で遺構面である茶褐色粘質土が確認され、この間には深土の暗黒茶色土が堆積する。さらに遺構形成面下約 0.15m では黄色が強く反映した黄茶褐色粘質土の基盤層を呈する。

(2) 検出遺構

竪穴住居

4SI05 (Fig.3、Pla.2)

東側調査区の南側で検出した。住居の北東隅が辛うじて検出できたが、南部は 4SX15 によって切られている。建物の方位は G.N. より若干東に振れており、東壁コーナーに近い場所でカマドを検出した。住居内はカクランを著しく受けており、袖部を僅かに検出したのみであった。残存するカマドを土層断面で確認したところ、袖部は淡茶色粘質土を呈しており、両袖部内側には黄褐色焼土（一部炭化物を含む）が厚く付着したような状態で確認できた。カマド内部の焚口に近い場所では炭化物を含む黒茶色土が薄く堆積し、底部では数センチほど堆積した明橙色焼土を確認した。カマドより南壁に至る床面には明茶褐色粘質土の貼床が厚く覆われており、この貼床を除去するとピット状並びに土坑状を呈する不整形な掘形が確認された。住居埋土中からは土師器（甕）、カマド周辺からは土師器（小皿、坏、甕）、須恵器（坏）が出土しており、9c 代の時期が想定される。

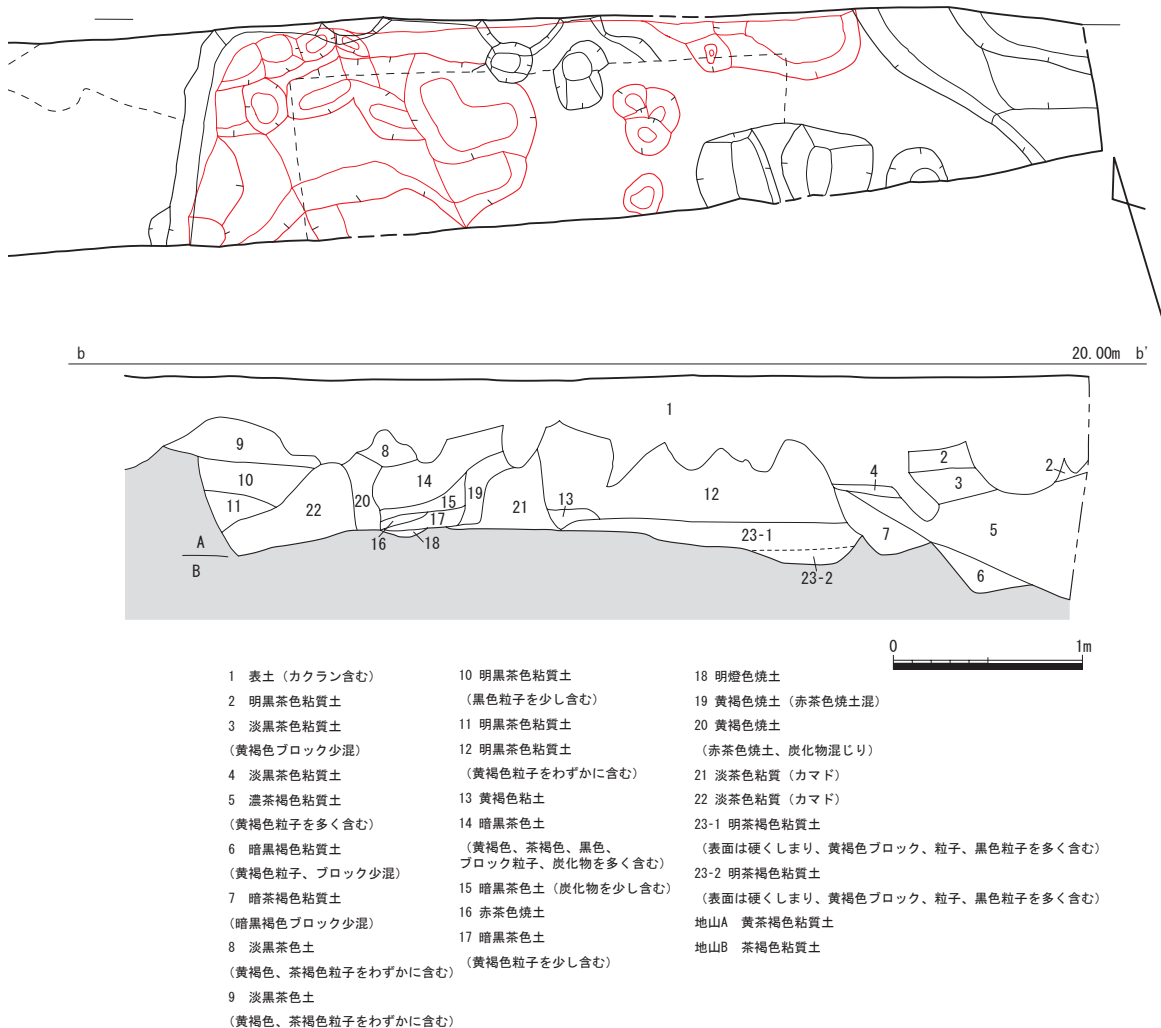


Fig.3 4SI05 実測図 (1/40)

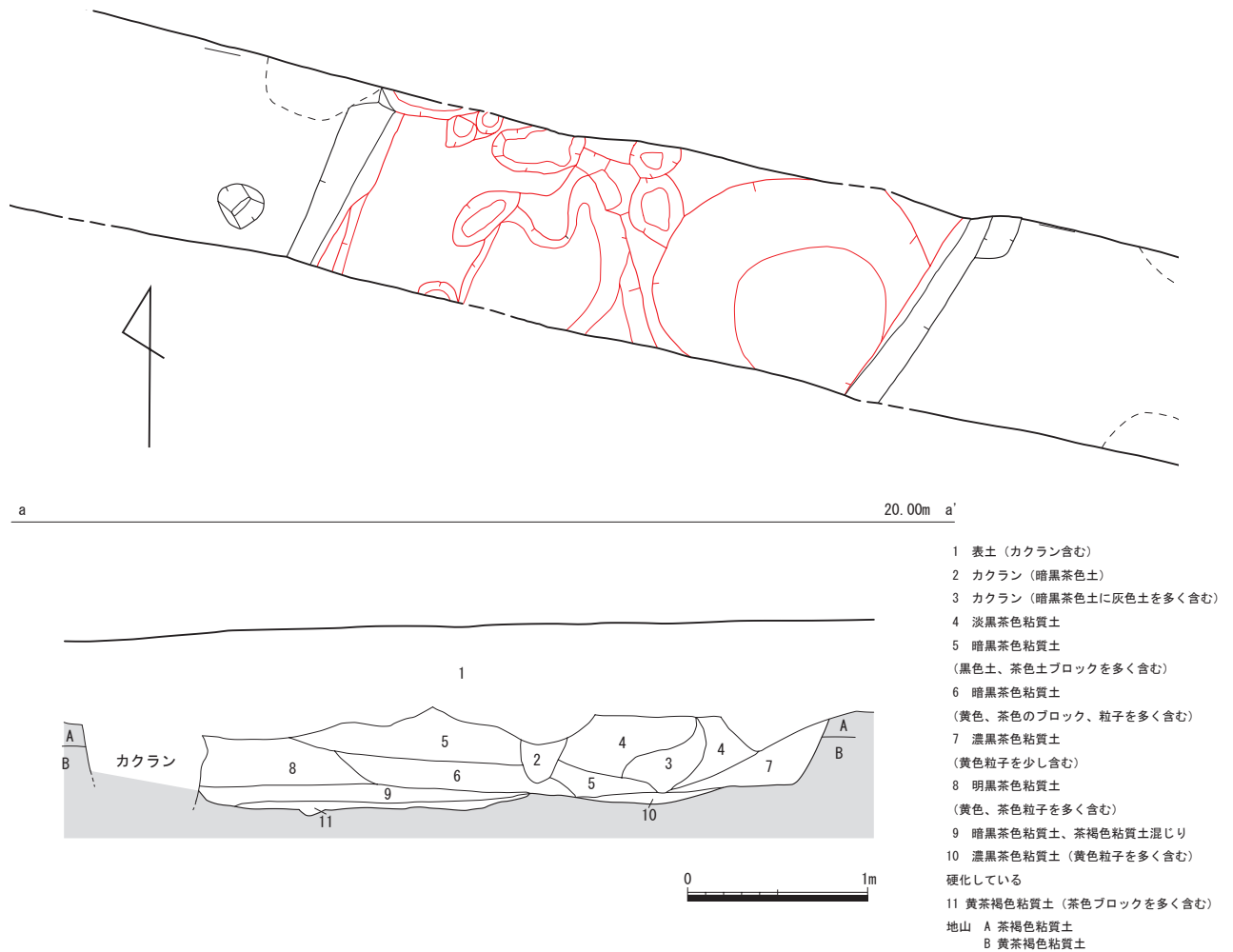


Fig.4 4SI10 実測図 (1/40)

4SI10 (Fig.4、Pla.3・4)

東側調査区の北側で検出した竪穴住居で東西長 3.4m、深さ 0.5m 前後を測る。住居内は黒茶色粘質土を基調とする埋土であり、貼床には表面が硬化した黒茶色粘質土、黄茶褐色粘質土が堆積する。貼床下は浅いピット状並びに土坑状の掘形を確認し、少量の土師器（甕）を出土している。南部で検出された 4SI05 とほぼ同位であることに絡み、遺物の出土状況から同時期の 9c 代が比定される。

ピット群 (Fig.5・6、Pla.5)

東西の調査区からは掘立柱建物の柱穴と思われるピットが多数検出された。平面プランは概ね楕円形を呈するものであったが、4SP04・06～08 (東側調査区) のように方形状を呈するピットも確認された。その中でも墨書土器が出土した 4SP08 は 4SP11 を切るように検出し、長軸 0.69m、短軸 0.45m、深さ 0.95m を測る。南北にテラスを有し、墨書土器はピットの中央部、柱痕に位置する箇所を上向きに確認し柱穴を封印するかのような状態であった。遺構検出面から 0.32m の深さで確認された。

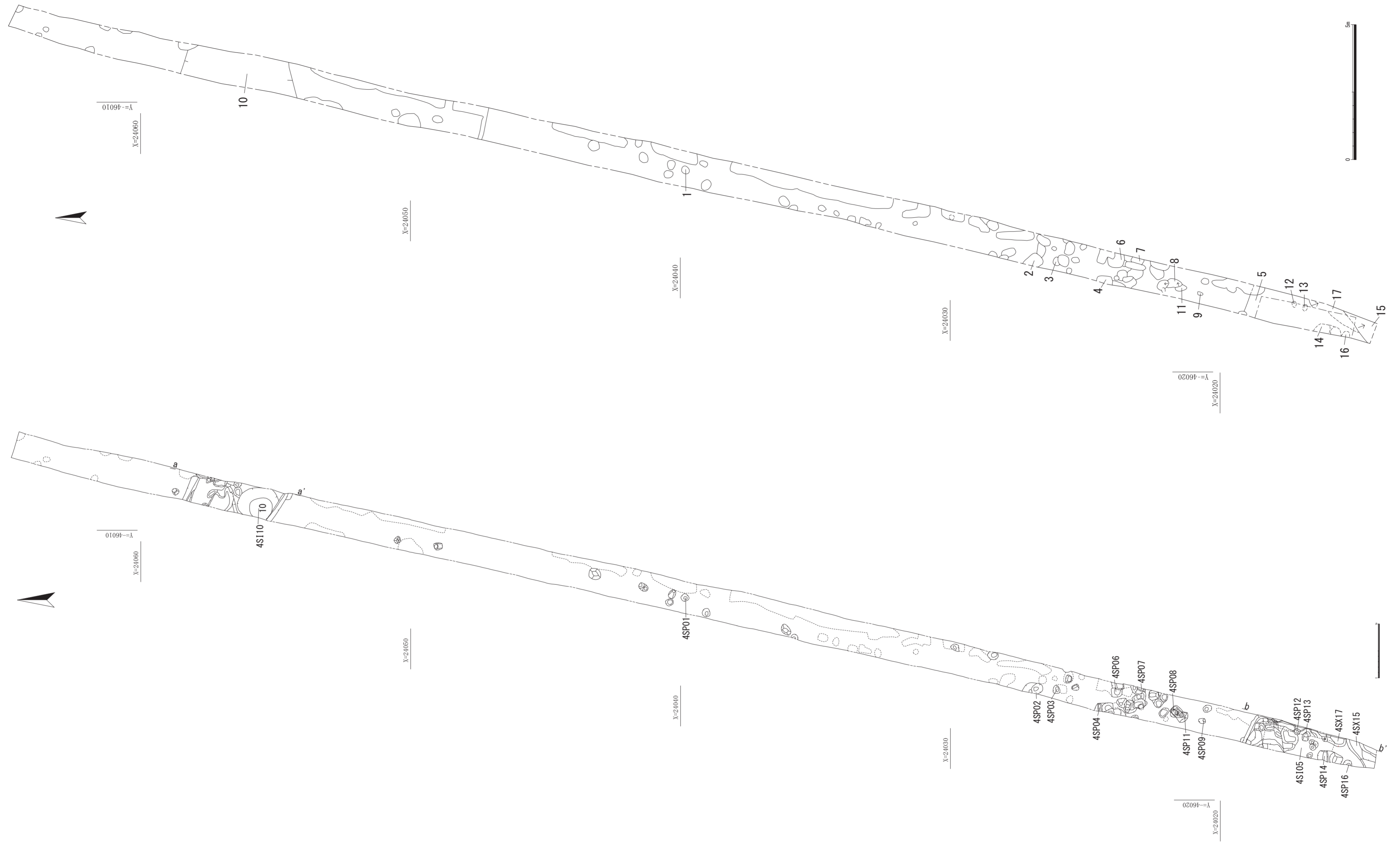


Fig.5 東側調査区略側図・平面図 (1/100)

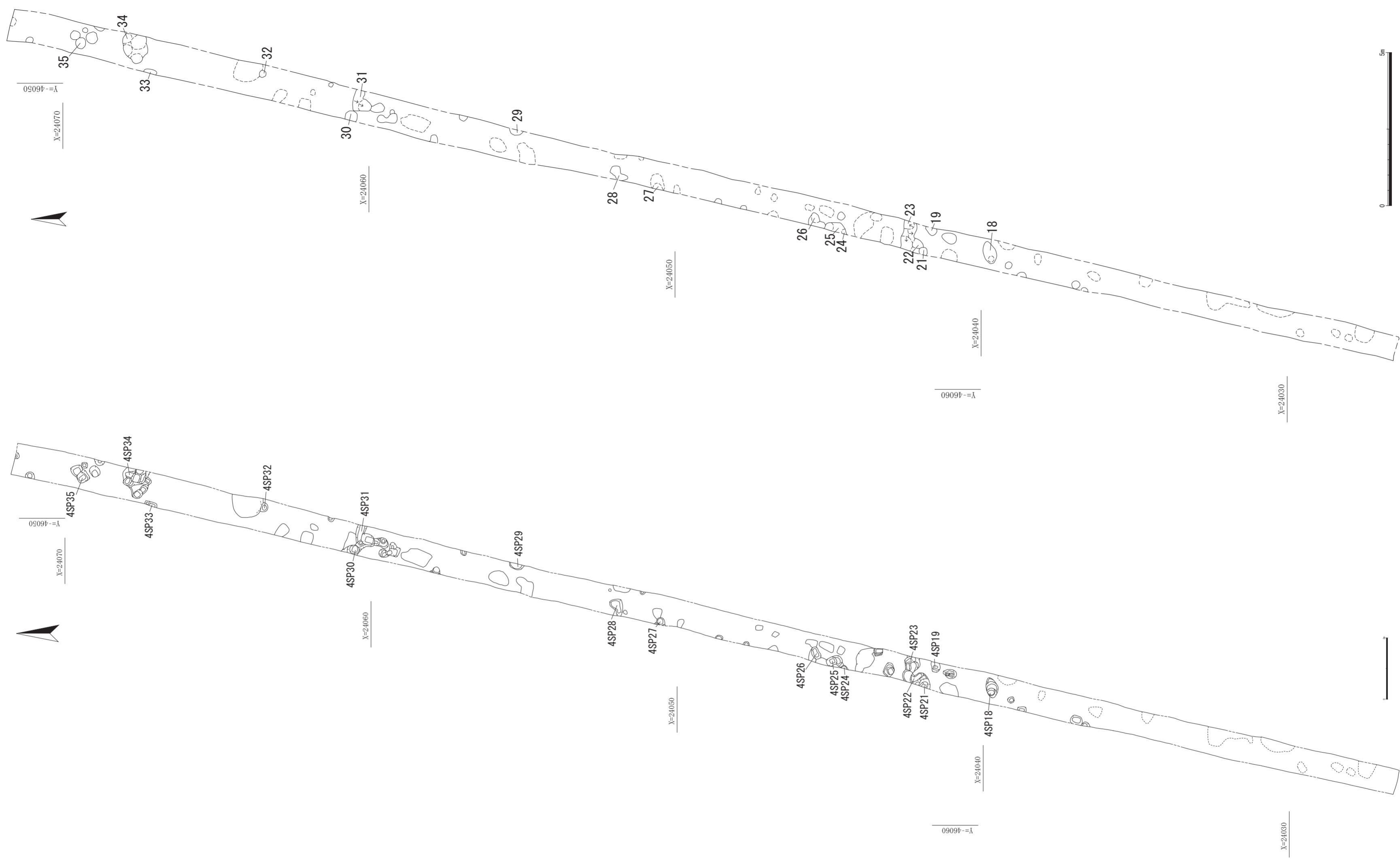


Fig.6 西侧調査区略側図・平面図 (1/100)

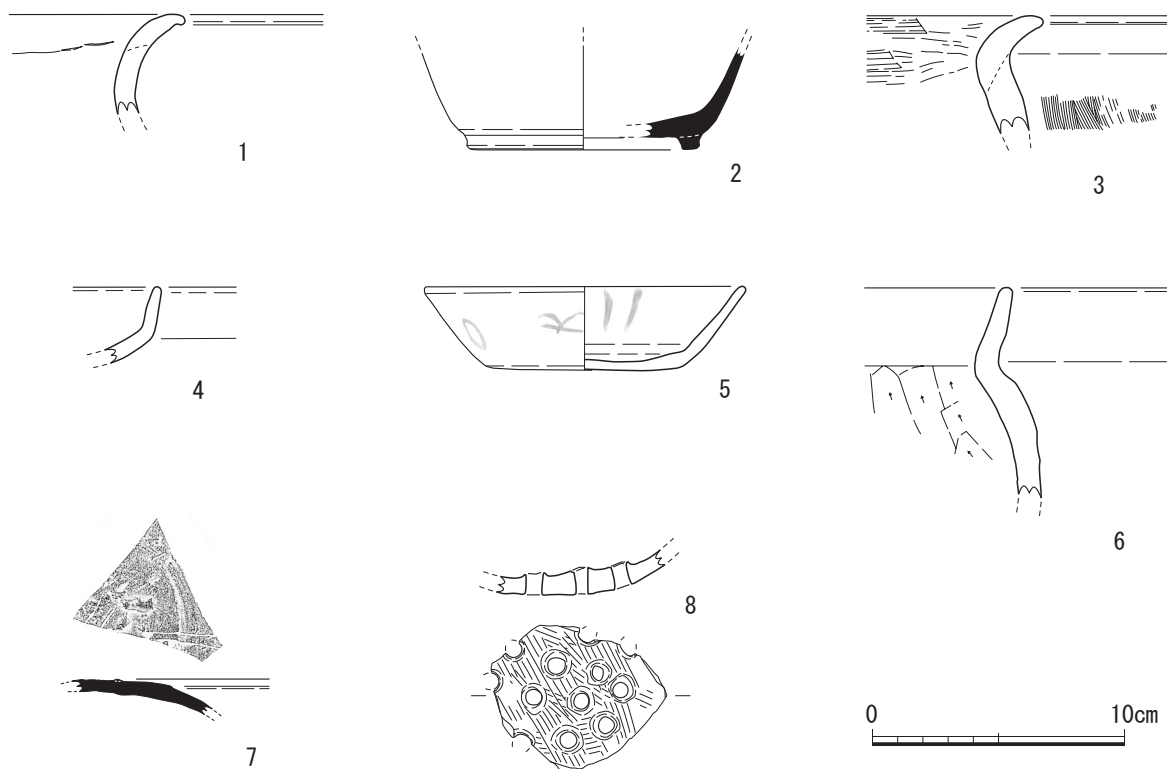


Fig.7 出土土器実測図 (1/3)

(3) 出土遺物

竪穴住居

4SI05 (Fig.7、Pla.6)

土師器

甕 (1) 外反した口縁部細片で内外面は回転ナデ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈し胎土に微細な砂粒を少し含む。

4SI05 カマド周辺 (Fig.7、Pla.6)

須恵器

坏 (2) 底部細片で高台径は 9.2 cm を測る。断面台形状の高台を呈し、体部外面は回転ナデ後ナデ、体部内面は回転ナデ調整を認める。色調は黄灰色、胎土は微細な砂粒を多く含む。

4SI10 (Fig.7、Pla.6)

土師器

甕 (3) 口縁部細片で色調はにぶい橙色を呈する。口縁部外面はヨコナデ、内面は横方向の刷毛目、体部外面は縦方向の細かい刷毛目、内面はナデ調整を施す。

ピット

4SP02 (Fig.7、Pla.6)

土師器

皿×坏 (4) 口縁部細片である。内面及び口縁部外面は回転ナデ調整、底部外面はヘラケズリ後ナデ調整を施す。橙色を呈し、胎土は微砂粒を少量含む。

4SP08 (Fig.7、Pla.6)

土師器

坏 (5) 口径 12.75 cm、底径 7.85 cm、器高 3.35 cmを測る完形である。色調は淡黄橙色を呈し、胎土に微砂粒、雲母を少し含む。僅かに丸味を帯びた底部から口縁部にかけては直線的に立ち上がり、口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面は回転ナデ、底部内面はナデ調整が認められる。底部外面はヘラケズリ後ナデ調整を施し、全体的に丁寧な仕上げである。体部外面に「C」「大」、口縁部内面に「II」の墨書が認められる。

4SP08 (Fig.7、Pla.6)

土師器

甕 (6) 全体的に厚く丸味を帯びた甕で口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はナデ、体部内面はケズリ調整を施す。

4SP27 (Fig.7、Pla.6)

須恵器

蓋 (7) 天井部のみの細片で外面は回転ヘラケズリ後ナデ、内面は不定方向のナデ調整を認める。天井部の一部に降灰と二重線のヘラ記号を認める。色調は灰白色、胎土は微砂粒を多く含む。

4SP34 (Fig.7、Pla.6)

土師器

甌 (8) 底部片で 12 箇所穿孔を認める。内面はヘラケズリ、外面は刷毛目を施し、色調は橙色、胎土は砂粒、雲母を少量含む。

(4) 小結

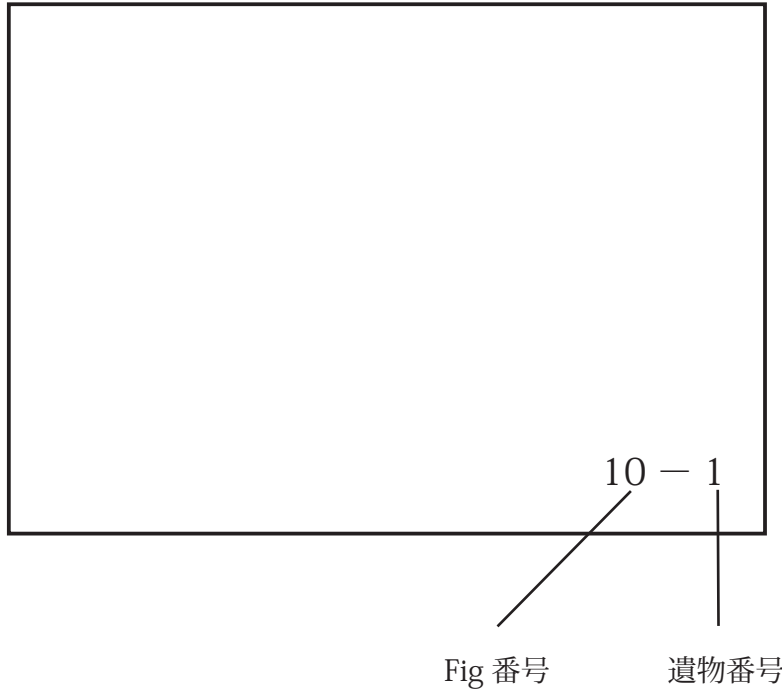
今回は市道拡幅に伴う発掘調査のため東西 2 箇所区分された狭小の調査区であったが、竪穴住居 2 軒、掘立柱建物の柱穴と想定されるピット群に加え、律令期の墨書土器 (坏) 1 点、ヘラ記号が施された須恵器 (蓋) 1 点が認められた。この調査結果から当調査区で検出された掘立柱建物は、当調査区の南側に隣接する羽犬塚中道遺跡で確認された 9C 代の集落跡に付随するものと捉えることができる。当地から北側にかけては徐々に丘陵が落ち込んでいくことから当遺跡は集落北縁部周辺に相当することも考えられる。

4SP08 から出土した墨書土器は先述したように体部外面に「C」「大」、口縁部内面に「II」と幾何学的に墨書されたもので 9C 代の所産と比定される。遺構中央部から柱穴を封印するかのよう確認された土師器 (坏) であるが、墨書は何れも判読できていない。さらに二重線でヘラ書きされた須恵器は貴重な資料となったが、細片資料であるため時期不明である。この 2 点は、近隣の羽犬塚中道遺跡や羽犬塚射場ノ本遺跡から出土した「□郡符葛□」をはじめとする「瀧」「東」「足立」の墨書と「井」「吉」と判読されるヘラ書き土器に次ぐ資料であるが、当地区は延喜式にみえる「葛野駅家」との関連性が重要視されており、新たに資料を加えることができたことは大きな成果であった。

PLATE

凡 例

遺物写真右下の番号は、以下のとおりである。





羽犬塚山ノ前遺跡東側遠景（南から）



羽犬塚山ノ前遺跡西側遠景（南から）

Pla.2



4SI05 床検出状況（北から）



4SI05 土層観察状況（西から）



4SI10 土層観察状況状況 (西から)



4SI10 カマド土層観察状況状況 (西から)

Pla.4



4SI10 カマド検出状況（西から）



4SI10 完掘状況（南から）

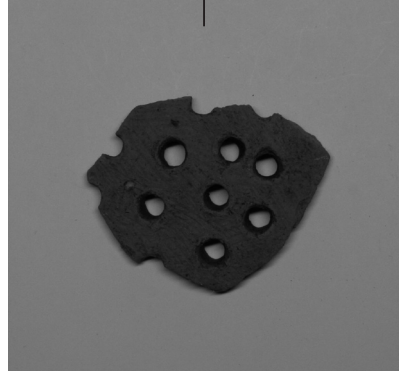
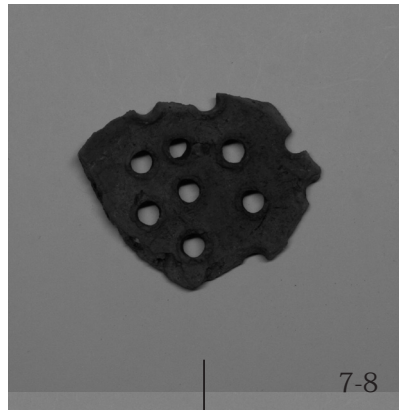
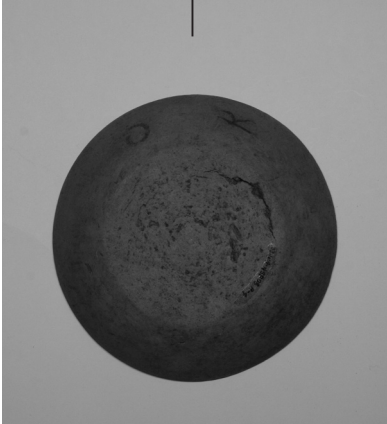
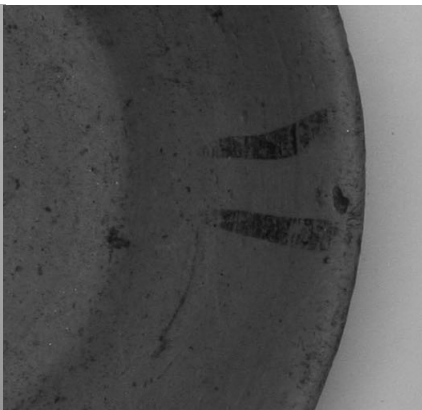
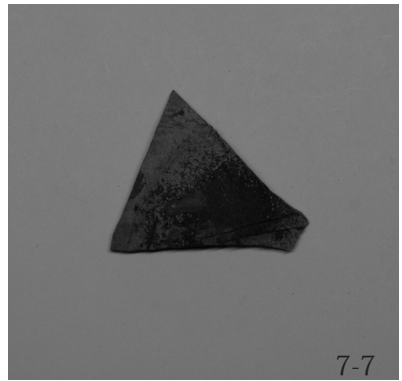
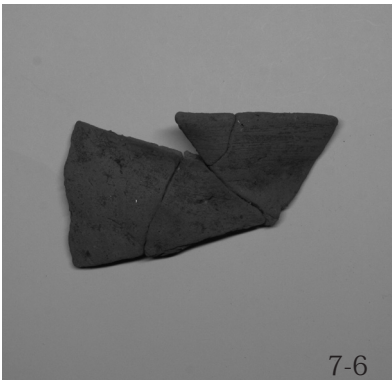
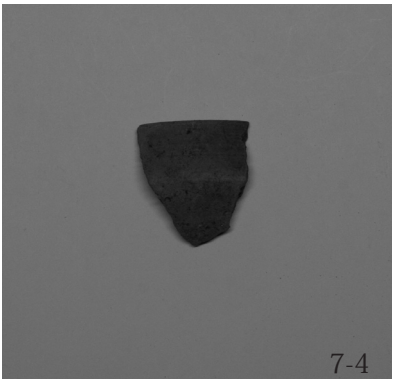
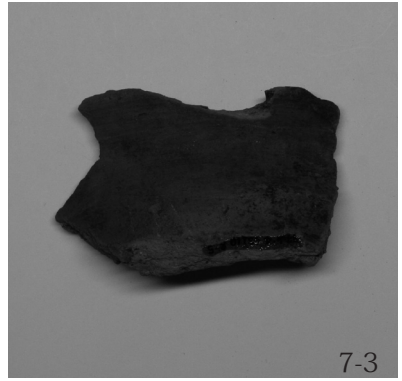
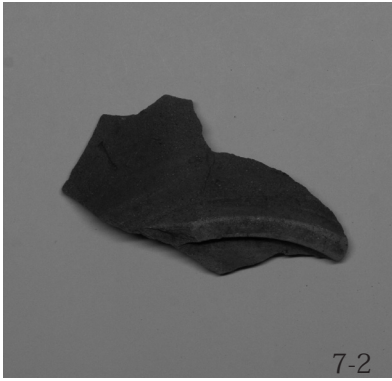


東側調査区ピット群確認状況（南から）



西側調査区ピット群確認状況（南から）

Pla.6



羽犬塚山ノ前遺跡Ⅲ

筑後市文化財調査報告書

第 104 集

平成 24 年 3 月

発 行 筑後市教育委員会
福岡県筑後市大字山ノ井 898 番地
TEL (0942) 53-4111

印 刷 大同印刷株式会社
佐賀県佐賀市久保泉町大字上和泉 1848-20
TEL (0952) 81-8520(代)